

第八回研究大会における講述

神道について

花園神社宮司
医学博士

片山文彦

司会（渡辺博） ただ今から、片山文彦先生の「神道について」というお話をお伺いいたします。

片山先生は、花園神社の宮司をされている傍らといういい方は失礼かと思えますけれども、とにかく、両方ともご本職だと思えます。東京女子医大の先生でいらっしゃると同時に、立教大学でも教えていらっしゃるようです。医学博士の片山文彦先生をご紹介します。（拍手）

片山 ただいまご紹介いただきました片山でございます。

持ち時間一時間のうちの大体四十五分というお約束でございますので、四十五分ぐらいお話いたしましたので、その後、皆様方のご自由な質疑応答という

時間をいくらに残したいというふうに思います。

神道時事問題研究会

「神道について」というテーマでございますが、最近、神道についての関心が非常に高くなってきて、私ごときものにも、いろんなところで神道について話せというふうな要請がございますので、それなりに考えているわけがございます。と申しますのは、お宮の神職というのは、意外と神道について突っ込んだ研究といえますか、勉強をしてきていないという面がありまして、私なども、最初のころはいろんなことを聞かれても、全くわからなかったという状態でございます。

お手元にお配りいたしますが、私も「神道時事問題研究会」という研究会をやっております。毎月必ず一回やるということですが、そのテーマは、時々によって必ずしも神道の問題をその中に盛り込んでいくわけではなく、一般的なもの、それこそカルチャーセンターでありまして、いろんなテーマを取り上げながら今日に至っているわけです。

最初のころ、神道時事問題というような名前を付けたんですけども、これが適切かどうか、非常に堅苦しい名前だと思いつながら、そのままです。今日こういうふうな神道というものがあって、なかうがったネーミングであったとい

うふうに思っております。

と申しますのは、神道という、変らないといえますか、不変の部分と時事問題、いわゆるファッション、非常に変わりやすい部分というものが、日本の歴史の中であざなえる縄のようにして、今日に至っているのではないかと。すなわちわれわれの意識というのは、要するに潜在意識と顕在意識というふうな言い方をいたしますが、顕在化されたものは氷山の一角みたいなもので、非常にわずかな部分であるといふのに対して、自己と申しますか、埋もれた部分というのは非常に大きい。顕在化された自我、われわれは自我で動いているようなものでありますけれども、実際には本能の支えによって生きていく部分が非常に多いわけです。

この自我というものが非常に変転きわまりないので、不易流行なんていいますけれども、自我は流行ファッションの部分でございまして、埋もれた海面下にある潜在的なものが不易、変らないもの。まさに変転きわまりないものというものは、その時々時事問題であり、変らないものが神道ではなからうかというふうに考えてきたわけでございます。

このごろテレビで古い映画をやっております、つい最近も小津安二郎の『東京物語』であるとか、この間も、石原裕次郎主演の三十年前の映画をやっておりますが、ああいうのを見ておりますと、三十年前ですから、私などが二十歳前後でございまして、その時代をよく知っているはずでありますけれども、いろんな風俗、ものの考え方、男女間の考え方、女性が男性に依存していた、そういう時期のものの考え方というものが、今日見ますと、非常に変転きわまりないものを写しだしているということに、強く印象を受けただけでございます。

伝統だと思っている中に

古くないものもある

しかしながら一方では、その中に不変の部分として、今日まで変わらない原理原則といえますか、そういうもの

が同時に脈々と伝わってくるものがあるわけですね。時代物の映画やなんかで見ますと、果たしてああいうような考え方をしていたのかどうかということ、大変疑問に思うわけですね。でも、われわれが伝統だと思っている中に、案外、それほど古くないものもあります。

たとえばお祭りの神輿やなんかというものが、江戸時代からずっと続いてきたような印象を持つわけですね。でも、神田明神のお祭りにいたしましても、昔は山車の祭りだったわけですが、明治になりました、電線が張り巡らされて山車の人形がつかえてしまつて、動かなくなる。そういう実際問題の発生のもとに神輿の祭りに変つていった。ですから明治時代からあります。

それから神前結婚式というのは、これも昔からやっていたような印象を、つい持ってしまうわけですね。でも、神前結婚というのが行われたのが、日比谷大神宮、いまの東京大神宮で、明治三十三年に模倣神前結婚式というのが行われまして、その年の五月に当時の皇太子、のちの大正天皇と節子姫との結婚式が宮中の賢所で行われたということがあって神前結婚式というのが、一般に普及するようになったわけですね。

そういう意味では、われわれが伝統

だ伝統だと思っていることが、実にごく最近になって行われてきたというところがわかるわけですね。でも、われわれが思っている伝統性というものが、意外と、いつてみればファッション的のところを担っているのではないかと。そんなふうには思っているわけでございます。

明治以来 百十七年経過しているわけですね。おおよそ四十年、四十年、四十年というような時代区分があろうかと思えます。明治以来七十七年で終戦を迎えまして、今日四十年、大体、大雑把にいつて四十年、四十年、四十年。

明治の近代化と神社の統廃合

明治時代とともに近代化になるわけですね。でも、明治の初期の人たちのものの考え方というものは、駄目な日本人であつたわけですね。福沢諭吉にしても、いまだに封建的なものの考え方にして、それが三十八年日露戦争に勝ちまして、日本もなかなかやるではないかというふうなことから、ナショナルイズムが台頭してきたわけですね。

神社のほうにおきましても明治三十九年、いわゆる今日いうところの行政改革が全国的に行われまして、神社の統廃合が行われました。大体十九万社

余りありました神社が、明治の末には十一万ぐらいに合併したわけですね。役所的な感覚で整理統合していつたわけですね。

有名な植物学者であり、人類学者でもあつた南方熊楠などは、お宮の緑というものの保存ということと同時に、魂の問題である神社統廃合に対して、投獄されながら反対したわけですね。

それが衆議院で取り上げられて、一応の歯止めがかつたわけですね。でも、いずれにいたしましても明治三十七、八年、九年ぐらいの一つの境、それから敗戦まで一気に下り坂になっていく。下り坂といえますか、意識としては高揚していつたわけなんでしょうけれども、実際問題として、敗戦ということにいたるわけでございます。

その後また、ペンションになりました。日本人がまた駄目な日本人になつてしまつた。

明治の初年に、森有礼文部大臣が、今日われわれの赤面するようなことをのうのうといっている。日本の国語を英語にしまえ、というような言い方。と同じように終戦直後も尾崎弴堂なども英語にしまえ、と同じような言い方をする。こんなことをいふ民族というのはおそろくないんですか、それほど自信喪失といえますか、そういうものに見舞われた時期ではなかつたかと思えます。

さまざま日本人論

最近それが高度経済成長とともに、再び日本というものを持ち上げるといいますか、いわゆる、はやりの日本人論というものが盛んになってまいりました。ルース・ベネディクトの『菊と刀』。戦後すぐ出た日本人論で、今日でいいますと、古典的な日本人論でございませうけれども、その後、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』というような形で、日本人を持ち上げる議論が活発になってきた。

明治の四十年ごろには、軍事大国としての自信であったわけですが、今日では経済大国としての自信から、日本人の持っている能力というものを再び過大評価するような時代に立ち入ったわけでございます。

日本人論、いろいろございますけれども、中根千枝の「たて社会」であるとか、土居健郎の「甘えの構造」であるとか、あるいは高取正男の「事寄せの論理」であるとか、あるいは板坂元の「未練の文化」、鶴見和子の「のぞきの文化」といいますか、非常に好奇心に富んだといういい方をしているわけです。

しかし、そういう日本人に対する一つの見方は、なるほど、それぞれそれなりに一面をとらえているわけですが、

れども、意外と日本人は、縦社会、縦社会といながら、スクラム組んで、同窓会とかいろいろな横のつながりを持ちながら意気上げているグループも、たくさんあるわけでありまして、意外と横の社会であったりする。

あるいはのぞきといいますが、非常に好奇心に富んだといういい方をいたしますけれども、それは江戸時代、特に幕末は確かにものすごい外国に対する好奇心というのは旺盛だったんですけれども、今日は一般的に言って、そんなに好奇心に富んでいるというわけではない。むしろ一般の人たちというのはわりあいと閉鎖的といえますか、中へ閉じこもっている面があるのではないか。

それぞれ時代時代によってものの考え方というものは、先程申しましたように変転していくことがあるわけですね。

時間に正確なということ、パンクチュアルというわけですが、中学時代に、英米人はパンを食うからパンクチュアルだというような、単語の覚え方をしたわけなんですけれども、その当時は日本人の時間に対するルーズ、だらし無さというのが非常に目立った。当時でも鉄道の発着などは非常に時間が正確だったんですけれども、人が集まる会合を一つとっても非常にルーズであった。そういうものは子供たちの

間の中でも浸透していったと思うんです。

現在、非常に秒刻みで正確になったわけですが、どちらがほんとの日本人かといわれても、両方とも日本人なわけですね。ですから時代時代によって考え方も、生活、いわゆるファッションといわれている部分、上澄みの部分というものは、絶えず変わっていく、そういうものをもっているのではないか。

ですから日本人論というものが、確かに、ある一面はとらえていても、それが本当の日本人の神髄、原理的なもの、潜在下にあるようなものをとらえているかどうかという面においては、甚だ疑問にあたる場所があるわけですね。

神社神道と日本人のこころ

それに対してそれでは変らないもの、不変の部分、日本人の考え方の神髄といえますか、そういうものが何なのかということが、特に外国の人たちから、これも過大な期待かもしれないんですけども、関心が非常に高まってきた。

その原理的なものが、日本人の精神生活の中で脈々と続いてきた神道ではないかということに、だんだんと気が付いてきて、このごろある種の神道ブームといえますか、神道に対する考え

方が、非常に強くなってきたのではないかと、非常にふうに思います。

仏教の紹介などは、鈴木大拙の『禅の研究』やなんかもありますように、ある程度紹介されているわけなんですけれども、神道については全くといっていいほど、特に外国に対しては書籍も少ないです。紹介の本などもほとんどないに等しいぐらいであります。

私が研究会報にずっとつづけてきたものをまとめまして、きょう持っているのを忘れたんですけれども、『神社神道と日本人のこころ』という本を出しました関係で、「神道について」というような、きょうも中島先生からご依頼があったわけなんですけれども、ぼつぼつそんなご依頼を受けまして、神道についてお話しするわけです。

しかし、私自身の神道論というものも、最初本を書いた時点からまた変ってきている面があります。それほどまでに神道というものの難しさというものを、現場の神職といたしましても感じていたわけがあります。

正統派の神道論は、神職養成の大学というのには国学院と皇学館がございまして、折口信夫というような人たちが、折口信夫というような人たちが、柳田国男や折口信夫は、民俗学ですけれども、そういう人たちの系統といえますか、そういうものを踏まえたものが神道として、教科書的に説明されて

神道着せ替え人形論

いるわけでありませう。

ところが最近、神道に対して、国学院とか、皇学館以外の人たちから、また外国の人たちが非常に興味を持つようになり、外部の人たちが神道というものに対して非常に興味を持ってきているわけです。その一人に石田一良という東海大学の教授がおりまして、「神道着せ替え形論」という神道論を展開しております。「カミと日本文化」という書物になっておりますけれども。この本の冒頭にも同じようなことをいっているんですけれども、外国人に会った時に、日本は変わったでしようといったら、ちっとも変わってないとい指摘された。その変わってないというものは何かということ、石田先生は考えて、それは結局神道ではないかと述べておられます。

すなわち奈良時代の国家統一としての神道を利用した、いわゆる国家のシステム化として神道を利用した神道。それから平安時代になり、仏教が国民生活に浸透すると神仏の習合は益々進み、鎌倉時代に天台宗または真言宗と融合して、それぞれ、山王神道、両部神道となりました。これ等は仏主神徒の神道なのですが。

鎌倉時代から室町時代にかけて、神

を主として仏を従にした度会神道、吉田神道が巻き返しをはかり、更に江戸時代になると、従来の仏教思想を一扫して、江戸幕府の奨励した儒教精神との調和をはかった儒家神道が勃興します。林羅山、吉川惟足、山崎闇斎の学派がこれです。闇斎のものを垂加神道といいますが。更に時代が下って、加茂真淵、本居宣長になると、これ等の外来思想、儒仏二教の思想を掃した上古そのままの復古神道を提唱したのです。

明治時代になってのちの世に、国家神道といういい方をしたわけですけれども、国家神道を着て、戦後はぎこちなく民主国家としての着物を着ていると、そういうような表現の仕方をしていくわけです。

つまり、裸身の人形が神道で、その時代時代の衣裳を着せ替えて登場するような喩え方をしています。

石田先生は本居宣長の国学に対して柳田国男の新国学ですね、宣長は古事記に原点を求めたわけですが、柳田国男は新国学として時間的なものでなくて、空間的な拡がりとして、地方のいろいろな民俗の中に神道の神髄を見るところか、そういう民俗的な調査をした。

同じ東海大学の原田敏明先生あたりは、柳田国男の地方にいく形ではなくて、要するに石を落としましてその波

紋が拡がるのも一つの現象ですけれども、砂を落としますと中に古いものがたまっていくといえますか、むしろ、神道の神髄というのは大和地方を掘り下げて行かなければわからない。そういうアプローチの仕方をしていくわけです。

石田一良氏は、確かにそういう一つの原田先生の考え方を肯定しながら、それを否定いたしまして、縄文時代の呪術的な信仰、そういうものをぬぐい去った、農耕時代の儀礼習俗の中に神とその原質が見られる、そういうような表現をしております。

日本人のものの考え方が神道

しかし私は、縄文時代をも貫いて、日本人が日本人として今日まで連続としてつながっているわけですが、形は変わっても、その中に流れる日本人のものの考え方、そういうものこそが神道ではなからうかというふうに考えます。

石田先生は狩猟採取時代、こういう分け方をしておりますけれども、狩猟採取、それから水稲農耕ですね、それから機械工業。産業基盤が全く違うわけですが、非常に大まかに分け、こういう分け方ですね。

これは水稲が始まったのが、もちろんずれこみですが、弥生時代紀

元前の三百年ですね。それから機械工業時代が始まったのが明治になって、およそですけれども、四捨五入して一九〇〇年。トフラーなんかは第三の波とかいって、情報化時代といういい方をしておりますけれども、大雑把に言えば機械工業社会の延長線上にあるといえます。

縄文以前は旧石器ですが、新石器時代を経まして水稲農耕時代は鉄器時代。今日、機械工業時代、光ファイバーとか、ニューセラミックとか、こういういい方はもちろんしていませんけれども、新々石器時代に入ろうとしているわけですね。

石田先生は、神道というのは弥生時代以降というふうに見ているわけですが、けれども、私は縄文時代とこの時代の民族が全く入れ代っているわけではありませぬから、必ずそこになんらかのつながりを持っていると思うわけでありませぬ。

それを古神道、一般的にいっている古神道というのは仏教以前の神道を古神道といっているんですけれども、仮にこういういい方をしているわけなんです、もちろんこれはずれ込んでいくわけですね。

そして、農耕社会になりました、定着いたしました神社がそこにできると、それが神社神道といえるのではないかと思えます。

都市神道の出現

それから今日、太平洋ベルト地帯に人口の四七％が集まっている。都市というものに人口が集中し、人口が逆転しているわけですね。昔は農村のほうが人口が多かった。大多数が農村であって、九〇％は農民であったわけですから。

今日では農耕が産業基盤ではなくて、一般サラリーマンが主たるもので、当然、神社神道は今日まで続いておりまして、神社のお祭りの形というのは引き続きいてそういうものなんですけれども、われわれの新宿にあるようなお宮というものは、もう一つ拡がりを持ってきている。

一つの神社のあり方といえますか、地域の人たちが神社を見る目というのが、もう一つ変わるうとしている。これも私が名付けただけで、まだ認知されているものではありませんけれども、都市神道というようない方をしたわけですね。

つまり、狩猟採取時代は旧石器から新石器の時代であり、古神道の時代。水稲農耕時代は鉄器時代であり、神社神道の時代。機械工業時代は新・新石器時代であり、都市神道の時代といったように、対応の仕方を考えてみます。

やはりなんといっても産業基盤が違ってくることによって、ものの考え方のいうものが、あるいは信仰形態というものは、当然変わってくるわけでありまして、古い時代の神道というのは、非常に呪術的な要素が強かったはずであります。それはもちろん今日でも生きていくわけですね。

ですから、時代をこういうふうに分けたからといって、こっちのものが全くなくなっていくというふうになつたというのではなくて、それは混在しながら今日までずーっと続いてきているわけですね。大多数の人たちが、どういう考え方で信仰というものをとらえているかということからいえば、そういう変転の仕方、全く大まかなことでありますけれども、そういう変転の仕方をしているわけですね。

これは全く大雑把なことでありませうけれども、そういうとらえ方を、石田先生の機械工業社会とか、農耕社会とかという分け方に便乗して、私なりに考えたわけがあります。

神道という変らぬ皿

それから外の人といえますか、神道の専門家ではなくて外の人たちがいるんなことをいっているわけですね。

も、たとえば司馬遼太郎がドナルド・キーンとの対談の中で、神道という変らぬ皿の上に仏教とか、儒教とか、キリスト教とか、道教とか、そういうものが乗ったかといっているんですね。要するに不変の部分の中に、そういう外来宗教が乗った。そういういい方しております。

それから皆さん方にお配りいたしましたものの中に、グレゴリー・クラーク氏が私との対談の中で、右手の論理というようにいい方をしていられるんですね。右手の論理というものは、右手というのは誰でも、どこの民族でも持っていた考え方、信仰であります。それが外から入ってきたイデオロギーに圧迫されて、普通の民族というものは右手の考え方というのがなくなってしまう、そういういい方があります。

今日右手というより右脳、左脳というようない方をしますが、そういう意味からいえば、右脳の論理ということになるわけですね。全体を把握するような能力です。論理的な思想ではなくて、全体把握の能力、そういう一つの見方があります。

仏教は風呂敷、神道は空気？

それから、相模工大の佐伯真光氏はお寺の住職でもあるんですね。

相模工大で宗教学を教えている先生ですが、仏教を風呂敷にたとえて、神道を空気にたとえているんですね。

私は神道というのはそんな無色透明なものではなくて、むしろ有形な風呂敷に近いようなものではないかと思うんですが、要するに外国の宗教が、形のあるカバンみたいな形のものであるのに対して、日本の、東洋的といえますか、仏教としてのいい方をしていられるんですが、仏教というものは風呂敷、物を包みますと、その物によって風呂敷の形が変わるわけですね。そういうとらえ方をしております。

それから山本七平氏が、われわれの研究会で講演した中で、神道というものを外来から入ってくるものを振り分ける、いいものはとるけれども、要らないものは切り捨てる、そういう振り分けるという作業ですね、そういうものが神道だというようない方をしているんですね。

それから臨床心理学の河合隼雄、京都大学の教授ですね、私に話してくれました。チューリッヒに行きまして、ユングの研究所ですね。われわれ以上の世代の人たちというのは、若いころというのは必ず西欧志向型のもの考え方といえますか、そういうものにまず憧れるというんですね。哲学にいたしましても、西洋哲学をまず習ったりするわけですね。

河合先生はユングの研究所に行って、向うの人たちが曼荼羅とかなんとか、そんなことを話しているわけですね。自分は聞かれても何もわからなかったんです。

で、慌てて日本から『古事記』だとか『日本書紀』だとか取り寄せてむきぼるように読んだそうです。私は見なかつたんですけれども、NHKあたりで『古事記』だとか、神話の話をしたそうですけれども、要するに最初は西歐的なものの考え方とか、学問を収めている人でも、結局、最後は日本の研究というものが日本人がもっとも研究しやすいわけですから、帰ってくる。

そうすると、複眼思考ができるわけですから、より日本というものに対して、あるいは神道というものに対して深く物事を考える、そういう視点ができるわけです。河合先生は中空の論理というようにいい方をして、要するに天照大神と月読命と須佐之男命と三極原理で中が抜けているというんですね。その中が抜けているところが日本の強みだという言い方をしてるんです。

オリジナリティーがないのが

オリジナリティー

それから詩人である高橋睦郎氏が日本というのはオリジナリティーがないの

がオリジナリティーだというふうないい方。これも誰かの表現であります。が、神道というのは結局は何もないんだといういい方ですね。オリジナリティーがないのはなにもないといういい方は、ちょうどラッキョウの皮をむくようにして、中に芯が何もなかったというようにですね。

そういう、いろいろな人がいろいろな雑多な意見をいいながら、神道というものを、それこそ群盲が象をなでるようにしてですね、神道とはなんであるかということなでまわっているというふうに見られるわけでありまして。一つにはこういう大雑把な分け方とともに、先程、着せ替え論でも申し上げましたけれども、神道というものをもうちょっと細かく時代区分をしていきますと、神道の取り上げ方として、非常に変転きわまりないといえますが、一番最初に私は潜在意識というものは変わらない部分、変わらないというのはこの世の中になんてすけれども、それでも人間は変わらない部分というものに対して、不変の部分に対して求める。

神道の中の二層性

そういう不変の部分を求める期待感というものがより強いわけですが、先程、神道というものが不変の部分であ

って、時事問題、情報、ファッションというものの変転きわまりない部分と、こういういい方をいたしましたけれども、神道の中にも二層性があるのではないかと思うわけです。裸身の部分と衣裳のどぎつい色に染った下着の部分と。

上積みの部分は、時の権力者がいろいろいじくりまわして、いわゆる国家統一のために利用するとか、そういうガラッと変ったような取り扱いをする。仏教は風呂敷だといういい方を佐伯氏がいわれたんですけれども、まさに神道は風呂敷みたいな要素を持っている。

風呂敷だって使い方はいろいろ便利でありますけれども、場合によっては人の首を締めて殺すことだってできる。だからといって風呂敷が悪いというのは理屈に合わないんですけれども、そういういわれ方をした。国家神道なんてまさにそういういわれ方をしてきたんです。

仏教が入りましたのが五百三十八年とも、五百五十二年ともいいますけれども、それ以来、物部氏と蘇我氏との宗教戦争、権力争争が始まるわけです。物部・中臣の神道、それまで民俗的なひとつの信仰形態というものを維持してきた一族に対して、新しがりの蘇我氏が仏教を取り入れて対抗した。で、仏教側が勝ったわけです。

それをプロデュースしたのが、聖徳太子なわけですけれども、聖徳太子は仏教にのめり込んでいたために、平等という一つの考え方ですね、仏教の、仏の前にみんな平等と、そういう慈悲の心が蔓延していったというか、聖徳太子一族が殺される。一網打尽に殺される。そういう悲劇があったわけです。

その後、大化改新で蘇我氏が滅びる。壬申の乱を経て、いわゆる鎌足、不比等の、この辺は梅原猛氏の考え方でありまして、藤原神道ですね。要するに聖徳太子が仏教をプロデュースして、それがために聖徳太子一族が滅んだということと見ていたわけですね。再び神道というものを国家統一のために利用した、イデオロギーとして利用した。

で、神道と仏教とを両刀使いでうまく利用しながら、国家統一のために神道を利用した。しかし陰湿な陰謀がそこになされたわけですね。それに対する怨霊思想というものが非常に根強かった。

その後、菅原道真も怨霊のための、天神さんというのはもともととは不遇に死んだ菅原道真の祟を鎮めるためのお宮であるわけですね。不比等、藤原氏の子供四人が次々と天然痘で死ぬというようにも祟だというようになことで、聖徳太子の怨霊を鎮める。それが法隆寺でもある。そういう祟信仰に

対する一つの信仰形態ですね。

普通にわれわれが神様に祈る時は、自分の先祖の神やいろんな神様を思い浮かべて、それに助けを求めるわけですね。すけれども、一方では祟を封じ込める。そういう信仰が急に拡大してくるわけですね。ですから中臣の神道というのは、むしろ鎮魂の、御霊鎮めの神道なんですけれども、襖袂えの信仰が、藤原時代にいま一度神道というものを蘇らせ、それを国家統一に利用したわけでありませう。

ですから神道というものは、冒頭に申し上げましたのは変らぬ部分だといういい方をしたんですけれども、神道の中にも二層性がありまして、上澄みの部分と川底の部分といいますが、そして基層の部分は土着の民俗、庶民一般の人たちがその時代時代によって神に對する祈りだとか、素朴な願いだとか、そういうものですね。

もちろん戦前と今日とは願うことが違うわけですが、願いの心持ちであるとか、そういうものというのは、いつの時代にも変わらないものではないか。しかしながら上澄みの、いわゆる一般にいつている神道ですね。上澄みの部分の神道というものは、その時代時代によってクルッと変わる、変転きわまりない要素をもっているのではないか。

くるくる変わる日本人の考え方

私が本の中にも書いたんですけれども、私自身の子供の時からひとつの疑問点として持ち続けてきたものが、戦争中は鬼畜米英とかなんとかいって、英米人を鬼・畜生みたいにいながら、戦後民主主義になるとガラッと変わった。それが同じ大人の口から聞かされると、これはどういうことか。

中根千枝氏なんか日本人というのは軟体動物だなんていういい方をしていませうけれども、変転きわまりない。そういうものの考え方がクルクルと、変っていく変り方というのは、どういふところからきているかというところを、長い間の疑問として持ち続けてたんです。

それは何といたっても日本という国が適当な大きさを持って、大陸から適当な距離をもって、まさに極東、東の果てにあるという地理的条件によって、恵まれた国にあるということによって、そういう考え方が起きているのではないか。

普通、大陸にあって部族と部族がぶつかり合いますと、一方が滅ぼされる。部族と部族がぶつかりますと神々も戦うわけですね。そうすると征服された部族というのは皆殺しに遭う場合もあるでしょうけれども、皆殺しでなければ

ば奴隷みたいになる。二層になるわけですね。

ところが日本列島というのはそういうぶつかり合いという機会が少なかったんです。外から朝鮮半島を経て、ポチポチくるわけですね。ポチポチくると、少数民族であるわけですが、少数民族はレベルが高いわけですね。統治ノウハウも持っていますから、いかにして原住民、多くの部族を懐柔して統治するかということを考えるわけですね。

それは頭をひねくり回して考える。要するに戦国時代に出会って、短時間に決着ということではないわけですね。そこには少数民族が大多数の民族を統治するために、陰謀とか、要するに頭脳戦争になるわけですね。そうしますといかにしてその原住民の信仰をうまく治めながら、お払い箱にするか。

お払い箱というのはまさに、神宮の御師があちこちへ行って泊まって、どうしようもない御師がいるわけですね。そういうのをお払い箱にするということなんですけれども、古代においてもお払いというのは、まさに厄介払いというような意味合いがあります。

そういう日本列島の地理的条件というものが、日本の信仰形態というものを、あるいは日本人のものの考え方というものを、非常に特徴付けている最大の要素ではなからうかというふうには

思います。

土着信仰の地肌

普通どこの民族でも土着の民族宗教というのがあったはずなんですけれども、それが外からの外来宗教、イデオロギーを持った宗教によってつぶされてしまう。その土から化石として出てくるかもしれないけれども、日本の場合には、それが地肌に出ている。それがまさに日本の神道ではなからうか。その意味では日本という国が、土着の信仰を根強くもって、神道という形として、根強く持って生き続けている唯一の国ではなからうかというふうに思います。

話があちこち飛びまして、ちょっと予定よりも持ち時間を過ぎましたけれども、以上をもちましてお話を終了させていただきます。

どうもご静聴ありがとうございました。(拍手)

何かご質問がありましたら。ちょっとまとまらない話になってしまいましたけれども、あと五分ぐらいあるようですから、質問をお受けいたします。

問 先程のお話の中で、先生のご著書ですね。それから東海大学の石田先生のご著書ですね、どこからどうというタイトルでお出しになっているのか教

えてください。

答 石田先生のは『ガミと日本文化』で、ペリカン社ですね。私の書いたのは『神社神道と日本人のこころ』、日本地域社会研究所からです。

問 先生のお話をずーっと伺って、まして、不易の部分というのがどういふものであるかということ、ちょっと頭の中に描けないですけれども、それはどういふことでしょうか。不易の部分というのは。

答 厳密にいうと、不易の部分というのではないと思うんですね。これは自然科学的な見方といえますかね。

しかし、われわれの生活の中で、信仰なんかもそうなんですけれども、親子の信頼関係とか、そういうものは、もちろん例外はございますけれども、親子というのはわりあいといふの時代だって、あまりものをいわなくたって



片山文彦氏

わかると思いますかね。親は子供のことを思い続ける、子供というのはわりあいと親のことを思わないですけれども、それでも亡くなったあとには、ずーっと親のお墓参りもしますし、特に日本人の場合には、そういう連続性を持っていると思うんですね。そういうものを私は不易の部分じゃないかと思うんですね。

もちろん例外はありますけれども、精神生活の中で動きやすい部分というのはたくさんあるわけですね。それに對して不変の部分というのは非常に少ないものだと思うんですね。その人の持っている信仰とか、いま申しました親と子のつながりとか、そういうもので、ごくごく少ないものになってくるんじゃないかと思うんですね。

これはそれこそ自然科学のものの方なんですけれども、高等動物というのは、精神というものを持っているわけで、精神と肉体があるわけなんですけれども、昔は物質、無生物と生物の間には確然とした境があったわけですね。

しかし、ライフ・サイエンスという言葉は一九七〇年に初めて登場するんですけれども、肉体の部分というのは、無生物の延長線上だなというものの考え方、要するにわれわれの身体は物質によって、これは完全に自然科学的なものごとの発想なんですけれども、

そういうものとながっているわけですね。

精神というのは、肉体の、要するに脳の部分から発生しているわけですから、無生物から精神までつながっているといえなくありません。ところがその距離は、天文学的数量で測らなければならぬほどです。ですから、自然科学的にみても、精神については、何もわかっていないのです。精神の働きを現象として捉え、脳のどの部分がこうした働きに預っているか、といったことを大脳生理学でいっているにすぎません。思想も精神のいとなみですが、思想の正統性は何もないんです。

たとえば儒教という非常に高邁な思想がある。この非常に名譽を重んじる思想であるのに対して、老荘の思想が出るわけですね。それを根底から引っ繰り返すような思想ですね。名譽なんか非常にくだらないものでいい方。

それから朱子によって朱子学が出来ます。それに対して陽明学が出るというふうな、テーゼに対してアンチテーゼというものが出てきて、それをひっくり返すというわけですね。じゃ、どっちが正しいかというのと、どっちも正しいといえるし、正しくないともいえる。要するにどっちが説得力があるかというところだけに過ぎないんですね。そういうイデオロギーとか、思想と

か、精神活動というようなものというのは、ものの原理というものは、なんの根拠がなくていつているわけですね。ただどれだけ人を引きつける要素を持っているか、それだけに過ぎないわけです。ですから精神生活というものは不易というものは、せんじ詰めればなんにもなくなってしまう。

ただ、人間が人間として誰がどんな信仰を持とうと、それは自由だと思えますけれども、人間が人間として生まれ出でた事実、それは両親があったから初めて生まれたという事実ですね。これは誰が信じようが信じまいがそれは事実の問題です。

事実の問題から生まれる人々の感情、もちろん例外はありますけれども、この世界に行っただけで変らないものだと思うんですね。たとえば親と子のつながりというものは、気持のつながりですね。精神生活の中で不易の部分というのは非常に少ないんですけれども、せんじ詰めればそういうところに落ち着くんじゃないか。それは変らない部分ではないかと思うんですね。それがあえていえば、不易の部分ではなからうかというふうな思う。要するに事実ののっとなって。

神道のキーワードとしては、存在するということですね。存在するということは、必ずそこに意味があるから存在するわけでありまして、それが生成

発展する。存在ということ、生成と
いうことが私は神道のキーワードでは
ないかというふうに思います。

その物事の立場立場によって、全く
違うわけなんですけれども、われわれ
は個人であり、家族の一員であり、地
域社会、あるいは社会の中の一員であ
り、国家の一員であり、人類の一員で
あると思う。と同時に、自然、地球と
いう一員であるわけなんですけれども、
近代化というのは人類という立場のも
とに考えたわけですね。

個人のということを用いて、非常に
エゴイズムになりますけれども、人類
ということについては、人類のために
ということについては、誰も異議はな
いわけです。人類の立場に立って、人
類のためにこれをやるんだということ
については、誰も異議がないわけす
ね。

ところが益虫とか、害虫とかいうい
い方をするわけです。それは人類にと
って益するものであるから益虫であり、
害するものであるから害虫だというい
い方をするわけですけれども、害虫だ
ってこの世の中で一所懸命生きてい
るわけですね。害虫をどんどん叩くとい
うことは、それこそ生態系のバランス
をどんどん崩していくということす
ね。

まさに近代化というものは、人類と
いう立場、みんな合意したことであっ

たけれども、自然という立場に立たな
かったがために、公害をはじめとして
エコロジーのいろんな混乱を起こして
きたということがいえるのではないか
と思うんです。

それは神道にしてもそうなんです。
ある時は国家という立場に立ち、ある
いは地域社会、地域共同体に立った立
場というのには非常に強かったんです。

江戸時代には大体五十年ぐらいつづ
に飢饉が訪れたんですけれども、一七
八三年、相馬の中村藩で、餓死者が四
千四百人出たんですけれども、隣の
白河藩では一人も出なかつたんですね。
これはまさに地域エゴイズムだと思
うんです。

要するにその時代だって流通機構が
発達してはいないとはいいながら、そ
ういう問題ではなくて、いかに地域エゴ
があったか、見殺しにしたわけですね。
自分たちの藩だけは守ろうとして、一
人も犠牲者を出さなかつたけれども、
隣の藩ではバタバタ死んでいったと
いうような事例があるわけです。
それでは終わりにいたします。どう
も失礼いたしました。
(拍手)

新刊

古代の霧の中から 古田武彦著

出雲王朝から九州王朝へ

古田武彦氏の最新刊である。島根県
仁多郡横田町や大阪市、豊中市での講
演録が主体となっているが、従来の著
書に収録されていないサブジェクトが
多く、また、最終章「最新の諸問題に
ついて」は書き下ろしで、『万葉集』巻
一(29)の柿本人麿の歌「過近江荒都
歌」に関する新解釈など、いつもの通
り斬新なテーマが豊富である。

講演のテーマ起こしというのは難し
いものだが、極めて良好に処理されて
いて、古田氏の講演を聴いたことのある
読者には、紙面からその口調や迫力
が伝わってくるであろう。

序文の中で古田氏は、**「い
じめっ子」**問題が論じられて久しい。
しかし、その母胎は日本社会の体質そ
のものにあるのではなからうか。「いじ
めっ子」の基本とされる「シカト」(共
同無視)の因襲は、知的エリートたる
べき、わが国の学会の、抜きがたい体
質をなしている」と書いているが、邪
馬臺国ではなく、邪馬壹国だと主張し
て以来、次々と貴重な学説を発表しな
がらも学界主流に無視され続けてきた
著者の怒りが全編を貫いている。

さて最近、高句麗の「好太王」のこ
とを「広開土王」と書く新聞が多く、

戸惑を憶えるのだが、本書を読んで、
その内幕がわかった。

本来、「田岡上広開土境好太王」、
つまり「田岡のほとり」で、広く土境を
ひらいた好太王であるのに、誰かが、
この広開土境という飾り文句から「境」
をはずし、「王」をくっつけて、新しい
王名を勝手に作り出したというので
ある。そして、この新(珍)王名を朝
鮮民主主義人民共和国の学者が使い、
大韓民国の学者も使うと、碑文に刻ま
れた本名に関係なく、日本の学者が使
い、教科書にも使われ始めてい
う。

なお古田氏は昨年(一九八五年)、
好太王碑を二度にわたって訪問してお
り、原碑に直面しての「高句麗好太王
碑再論」(最終章所載)は興味深い。
かつて私は、古田説が日本の教科書
に載るのは五十年くらい先であろうと
思っていた。しかし学界主流の「シカ
ト」にも拘らず、案外早い機会に載る
かも知れないと思い始めている。それ
は日本各地に古田武彦と古代史を研究
する会ができ、そのメンバーには、中
学や高校の教師も少なくないからである。
中島洋、
一九八五年十一月、徳間書店1,600円